

今、日本も世界も過渡期にあります。 課題解決力を磨くことが大切な時期です。

ヤスハラケミカル株式会社

代表取締役社長

安原 稔二 Teiji Yasuhara

国内外の産業界は、 先を見通しにくい状況にあります。

2012年から13年にかけて、日本も世界も過渡期にさしかかっているように思います。

国内では政権交代により経済振興への期待感がある反面、国内市場の伸び悩みから生産拠点を海外に移す流れが続いています。一方海外に目を向けると、ヨーロッパの経済不安や中国の経済成長スピードの減速などの状況があります。

国内外とも、産業界全体が先を見通しにくく、その一つの例が、商品市場の動きです。2002年からの長期的な視点で見ると、大豆や小麦などの商品価格は、軒並み高騰しており、例えばトウモロコシ価格は、10年前に比べ3倍に値上がりしました。小麦やトウモロコシなどの価格高騰は新興国の需要拡大が要因という意見もありますが、それだけでは説明できません。実態は、金融経済の力がダイナミックに働き、それにつれて全体が上昇していると考えの方が自然です。

原材料費の高騰や国内需要の低迷による厳しい価格競争は、今後も続くでしょう。日本もそれぞれの経営者が、それらに対応する課題解決力を磨いていくことが大切だと考えています。

グローバルな視点で需給を見極めながら、 事業バランスを整備しています。

こうした状況の中でヤスハラケミカルは、生産拠点を国内に残しつつ、企業として地域や社会にどのように貢献していけるかを考えています。

国内に生産拠点を残すとはいえ、ヤスハラケミカルが海外の顧客へ直接販売している比率は20%、2次3次の販売先まで含めると海外比率は50%以上になると推測されます。

企業を経営していく上では、国内だけでなく海外を含めたグローバルな需要と供給の動きを見ていくことが、今後ますます重要になると思います。

そこでヤスハラケミカルでは、グローバルかつ中長期的視野で事業バランスを整えることを経営の重要課題と考えています。

着実に利益を得る部門や将来の収益を確保する部門、需給をみながら変化させていく部門など、各部門ごとの将来性を慎重に見極めながら、事業のバランスを整えていきます。



2013年秋、 福山工場に技術棟と厚生棟を新設。

事業整備の一環として、2013年秋に、福山工場内に技術棟を新設し、現在高木工場などにある生産技術部門の移管を行います。

この移管により、生産技術部門にとって、これまで以上に仕事を進めやすい環境が整うことになり、今後の生産設備統合を推進するうえでも効果的です。また、既に福山工場に整備した研究開発部門と今回移管する生産技術部門の連携も、より深まることを期待しています。

技術棟新設と同時に、厚生棟もあわせて整備する計画です。この施設には、福山工場に勤務する従業員のための食堂や休憩施設などを完備します。厚生棟で各部門間の新しい交流や出会いが生まれることにより、社内に新しい風が巻き起こることも期待しています。

課題解決できる人材と技術を培うこと。 それが次の成長力になるはずです。

ヤスハラケミカルでは、新施設建設などのハード的な整備だけでなく、人材育成などのソフト的な整備も同時に推進しています。4年前から人材育成のあり方を根本的に見直し、新入社員から管理職まで、各ステージに応

じたきめ細かな教育プログラムを策定するなど、社員一人ひとりのスキルアップを全面的に支援しています。

日本は高度成長期に公害に悩まされてきましたが、その課題を独自技術で次々に克服し、「環境」「健康」「食の安全」などの分野で先進国となりました。そして現在は少子高齢化に直面していますが、この課題もビジネスチャンスと捉え、解決する技術を開発するという発想が大切です。

新興国も、やがて必ず少子高齢化問題に直面します。これから日本が少子高齢化という課題を克服すれば、それが日本の新しい強みとなるはずです。

同じようにヤスハラケミカルも、難しい課題を解決する力を企業の成長力にしたいと考えています。

難しい課題を克服するには、人材を育てることが重要であり、その課題が難しいほど、解決するための技術は高付加価値になるはずです。

ヤスハラケミカルは課題解決のできる人材と技術を培うことで、どこにも負けない付加価値の高い製品を、いつまでも市場に提供し続けていきたいと考えています。